

人は何を祈るのか

—『アンヌ・ド・ブルターニュの大時祷書』（フランス国立図書館ラテン語 9474 番）に見る
祈念表象—

田邊めぐみ（帝塚山学院大学）

ブルターニュ女公兼フランス王妃アンヌ（1477-1514）の注文によって、16世紀初頭にジャン・ブルディションが彩飾したとされる『アンヌ・ド・ブルターニュの大時祷書』は、フランス写本の最高傑作のひとつに数えられているが、337種にも及ぶ植物装飾に関心が向けられることが多く、そこに託された祈念内容については看過されてきた。しかしながら王侯貴族の所有する時祷書が、婚約や結婚、あるいは戴冠や親族の死といった何らかの重要な出来事を契機に注文・制作され、具体的な祈念内容に基づいた図像や装飾が施されることが多かった事実に鑑みれば、アンヌが所持した複数の時祷書のうち、際立って豪華に彩飾された当該時祷書に、同様の意向を検討する必要性は明白である。

具体的な祈念内容の解明は、時祷書の冒頭を飾る典礼暦の4月の月暦図（fol. 7r）によって促される。そこには花冠を編む女性が描かれており、従来アンヌ・ド・ブルターニュと同定されてきた。ただし当該月の図像には、花冠をはじめとする意中の異性への想いを表すモチーフを手にした人物や、婚前の男女の姿、あるいは婚約式の風景など、愛が成就する前段階の表象が選択されてきたことを想起すれば、写本が彩飾された時期には既にフランス王ルイ12世（在位1498-1515）と再婚していたアンヌの立場との矛盾は否めない。

ここで留意すべきは、アンヌの前に佇む女性の姿である。先行研究において、この女性は侍女とみなされてきた。しかし当時、花冠は想いを寄せる男性に贈るものであっただけでなく、婚約や結婚式の装身具として用いられていたことと、絵師への支払い命令書から推定されている写本の彩飾年代が、アンヌの娘であるクロードと次期フランス王フランソワ1世（在位1515-47）が婚約した1506年に重なることを考え合わせれば、侍女とみなされていた女性は実際にはクロードであり、彼女の婚約を示唆するものとして花冠を編むアンヌの姿が4月の月暦図に描かれていることが判明するのである。

以上の解釈が他の図像資料からも裏付けられるいっぽう、ブルターニュ公領がフランス王国に編入されることを憂慮するアンヌが、娘を王家の者に嫁がせることを反対していた史実とは一見相反するようではある。しかし、伝統的な図像からの逸脱が認められるアンヌの祈禱像（fol. 3r）や「三王礼拝」（fol. 64v）を写本が彩飾された当時の状況から仔細に検討すれば、全てはブルターニュ公位継承者となる男児誕生を希うアンヌの意向に従ったものと捉え得る。

本発表は、数多くの先行研究では見逃されてきた伝統的な聖俗両図像の一見不可解な構成要素や部分的な改変に着目し、それらを多元的・多角的に考察することから、写本の注文・所有主の具体的な祈念表象を明示するものである。この画期的な成果は、発表者が長年従事してきた15世紀ブルターニュ時祷書の祈念表象研究に基づくものでもある。